

私のオセアニア学ことはじめ その4

青柳まちこ (立教大学名誉教授)

1. ムルパラへ

ンガルアワヒアから、ムルパラに向かうためには先ずロトルアに出て、そこでローカルなバスに乗り換える必要がある。ンガルアワヒアからロトルアまでの主要路線を走るバスは座席指定で3時間乗って16シリング、ロトルアとムルパラを結ぶバスは1時間40分で6シリングである。このローカルバスには、大きな荷物を抱え込んだマオリのおじさんやおばさんが乗り込んでくる。何だか日本の田舎のバスを思い出し、これだから旅は楽しくて止められないと改めて思った。

ロトルアを出るとすぐに森林地帯に入る。見渡す限り、よく手入れされたラディアタ・パインの森が続く。ラディアタ・パインはカリフォルニア原産であるが、19世紀にニュージーランドに導入されると、よほどこの地の風土が気に入ったらしく、25年で30メートルにまで成長し、ニュージーランド植林の90%を占めるようになった。成長が早いということは、木質は密ではないので、もっぱらチップやパルプの原料として日本にも輸出されている。この辺りは国有林で、ムルパラのひとつ手前のカイガロアに森林を管理する役所がある。苗木の畑や、森林を見回るために駐留している小型機などが見えた。

果てしないと思われた森の中に、忽然とムルパラの町が現れた。山の落日は早く、午後4時40分というのにすでにうす暗く肌寒い。ひとまずホテルで荷を降ろし、チェックインして、訪問先を探すこととする。

ムルパラにやって来たのは、ミセス・プレベルがこの地のアングリカン教会のネルソン牧師と、教師をしているマオリ女性ジェダに手紙を書いて下さったからである。先ず牧師さんを訪ねたが今日はロトルアに行って留守とのこと、それではとジェダの家に行く。折よく家には明かりが灯っていた。扉を叩き名を名乗ると、如何にも好人物らしい男性が出てきて、奥に向かって「私たちの所に来ることになっている日本人の女の人が来たらしいよ」と声をかけ、中に招じ入れられた。私にとっては最初に見たマオリの家庭であったが、よく整頓されており、当時まだ珍しかった食洗機も備えられていた。

私がホテルにチェックインして来たというと、彼らは「それは駄目だ。家へ泊ればよいのに」と、ホテルへ行って私の荷物を取り返してきた。「何時も中国人に間違えられるのに、何故日本人とすぐ分かったのですか？」と聞くと、彼は「ここには中国人はいないが日本人がいるから」と答える。食後ジェダがその日本人女性の家に連れて行ってくれた。彼女はいわゆる戦争花嫁の一人で、呉出身、1年ほど前からムルパラに住んでいるという。マオリ人の夫は製材用トラックの運転手をしている。皆が彼女はマオリみたいと評していたが、たしかに一般の日本人より体格がよくて、色がやや浅黒かった。洋裁が上手なため、

注文が多く毎日毎日忙しいそうだ。

2. 再びンガルアワヒアへ

その夜は近くのコミュニティホールへ行って、ニュージーランド式ボーリングを習い、お茶をご馳走になって11時頃帰宅した。ところで何とジェダは、ンガルアワヒアのファイに出かける予定で、翌日の朝出発しようと誘う。私は昨日の遠路を考え、気が乗らなかったが、ここから東海岸に出るバスは当分なさそうだし、またあの愉快的な人々に逢うのも悪くないと思い、同行することにした。

翌朝ネルソン牧師の運転する車で、ジェダ、彼女の末娘、それにもう1人のマオリ女性と一緒に再び西を目指す。長い道のりをドライブし、4時半頃ンガルアワヒアに戻って、例のルアトリアの人々の泊っているマラエを訪れた。彼女たちは「よかったよかった。今晚は私たちのグループのカルチュラル・コンペティションがある。あなたはそれを見に帰って来たようなものだ」と歓迎してくれた。

ファイ期間中、各地区単位でアクション・ソング、賛美歌のコーラスなどの腕自慢、のど自慢がある。男女とも20歳以下のジュニア組とそれ以上のシニア組に分かれて出演するので、1地区4組が出場することになる。毎晩この夜のために練習してきたとのことで、女性の踊り、そしてその後続く男性のハカの踊りも見事なものであった。アクション・ソングで用いられている歌は結構流行歌を取り入れているらしく、どこかで耳にした曲だと思ったら「日曜は嫌よ」だったりする。入場料は5シリングもしたが、私は3晩続けて聞きに行った。同じ時間にツイストの競演もあり、少女たちにはそちらの方が人気があったようである。

会場に一人っていると誰かが必ず「何処から来たの？」と声を掛けてくれる。「私がマオリでないことすぐわかりますか？」と聞き返すと、「だってあなたの目は細いもの。私たちの目は丸いでしょ」と言われたこともあった。私が一人で歩いている時、「もし私が一人で知らない人の中にいたらどんなに心細いかと思うと、とても心配」と声を掛けて来てくれた人もいる。「何処から来たの？」といわれる度に、私はマオリ風発音でアーカラーナ（オークランド）と答えることにしていた。

3. ルアトリアのワノア家

4日目、総督が臨席されるというので、皆がマオリの伝統衣装に着替え始めた。この服装で一同並んでお迎えするのだそうだ。雲一つないすばらしい秋日和、よい写真を撮りたいと私まで腕をまくる。会場はもう満員、それでも私の周りで何時もお供をしてくれる子どもたちが、群集の間をかいくぐって、前の方に席を確保してくれた。

この時初めて遠来の客を迎えるマラエの正式な作法、槍投げの儀式を見た。総督が門口に姿を見せ歩き始めると、1人の戦士が「ウオー、ウオー」と叫びながら、槍を振り回して総督の前を飛び跳ねる。これは客人に敵意がないことを確かめる意図があるのだそうだ。

一連の儀礼的作法を経て、総督が席に着くと、すぐに女性たちのダンスが始まった。

ファイも最終日を迎え、朝食後一斉に帰り支度が始まった。これだけの大きな会合を取りまとめた事務局はさぞたいへんであったろう。多くの参加者が口にしていたことは、水洗トイレが何時までも綺麗であったことである。夜までトイレ当番が詰めていたとか。

私の身元引受人であったルアトリアの人々は、3台の貸し切りバスで帰るそうだ。私がギズボーンに向うというと、「それならこのバスに乗っていらっしやい。空席もあるし、ルアトリアからギズボーンまでならバスの便もよいから」と、大人も子どもも口を揃える。それではその好意に甘えることに決めて、皆の出立の写真を撮ろうと出口でカメラを構えていると、一人のおばさんが手招きをする。傍に行くと「ルアトリアでは誰か貴方を招待していますか？」と聞くので、「いいえ、未だ」と答えた。すると彼女は「それなら丁度よい。家にいらっしやい。家はボロ小屋、食卓にはテーブル掛けもない。食べる物はサツマイモだけ。でも貴方が家に来てくれればたいへん嬉しい」とのお誘いである。

彼女はカー・ワノアと名乗り、夫はアングリカン牧師。折よく通りかかったワノア師を呼び止め、「今晚から彼女は家に泊まることになったから」と宣言した。彼ら一家は息子の車で一足先に帰るので、長女メリーが一人残ってバスで帰る私の面倒を見ることになった。3台のバスには、シニア、ジュニア、青年組と分れて乗る。どれに乗ろうかと思案していると、ジュニアのバスから少女たちが私の名を呼んでいる。ひとまずそこに乗り込み荷物を網棚に上げた。するとシニアのバスから、メリーが探しに来てくれたので、そちらに乗り換える。他の女性たちがそれ毛布、それ枕と私に向けて、ほうり投げてくれるので、それにくるまり、たちまち眠ってしまった。ルアトリアの集会所に到着したのは、午前3時である。

これで解散と思ったが、ジュニアのバスが未到着ということで、それを待つことになった。暗く寒い集会所の中、肩を寄せ合って人々がひそひそと話していると、突然一人の男性が立ち上がり演説を始めた。手や首を振り、表情豊かにかなりの長口舌であるが、聞いている人たちはほとんど無表情であった。彼が終わって席につくと、別の男性が同様の身振りで演説を始めた。三番目に立ち上がったのは女性である。彼女が時々挟む英語で、第一の話者に対して何か怒っているらしいことが分かった。次の話者も女性であった。

聴衆は無関心と思われるほど静かで、誰かが話している間は口を挟まない。意見は次に立ち上がって述べるということらしい。後で聞いた所によると何かお金のことで問題があったそうだ。ところで、こんな風に女性が男性に混じって立ち上がり自分の意見を述べるのは東海岸だけで、ロトルアなどでは女性は人前で話さないと人々が言っていた。

ジュニアのバスが到着して、私も無事自分の荷物と再会し、ワノア家に着くと、ワノア夫人カーおばさんが戸口で迎えてくれた。ストーブの効いた暖かい居間で、暫くおしゃべりをして、朝の6時頃私に与えられたベッドに行くと、値札を外したばかりの新しい毛布に湯たんぽまで用意されていた。

翌朝、私がギズボーンへ行くバスの時間を尋ねると、カーおばさんは「何故今朝発たな

ければいけないの？」と私の顔を覗き込む。私がとくに出立しなければならない理由はないと言うと、「それならもっと泊っていらっしやい。貴方がバスの時間を聞いたことはたいへんショックだ」と熱心に勧める。そんなわけで彼女の親切に甘えることにした。

4. 東海岸のンガティ・ポロウ

ワノア家の構成は、ご主人のレフ、夫人のカー、長女メリー、そして結婚して近くに住んでいるメリーの弟が彼らの実子である。その他にカネア（女18歳）、ジャッキー（男12歳）、ニタ（男10歳）、アンザ（女5歳）の4人の子どもが居る。カネアとジャッキーは姉と弟、カーおぼさんの妹の子どもで両親がなくなったため引き取られた。ニタもアンザも同様に親類の子どもで、親が死亡したので、この家で生活している。どの子も行儀がよく礼儀正しかった。とくにジャッキーはカーおぼさんの命令のもと、コマ鼠のように動き回って働いていた。私のために湯たんぽを提供してくれたのも彼である。アンザは家族皆のペットで、少しおしゃまな彼女は何時も腰を振ってツイストの練習をしていた。

彼らの所属するンガティ・ポロウは東海岸の大集団で、現在でもイウィ（部族）人口は全マオリ中第2位である。19世紀末から比較的順調に羊牧業を発展させて、Apirana Ngata（アピラナ・ンガタ）のような傑出した指導者を生み出した。ンガタは弁護士で、後に政界入りし、先住民相としてマオリの地位向上に努力した政治家である。ヒクラギ山はルアトリアの西20キロにある1753メートルの山で、彼らの物語によればマウイが海底から釣り上げた北島の最初の大地だそうで、聖地である。彼らがよく歌う「山はヒクラギ、人はンガティ・ポロウ」という誇り高い歌を聞いていると、「花は桜木、人は武士」という言葉を思い出した。

第1日目に訪問したカーおぼさんの姪の姻戚の家の女主人は、昨晚集会所で演説していた威厳のある女性である。その息子に「羊は何頭飼っていますか？」と聞くと、「千頭」と聞こえたので、「千頭ですか？」と聞き返したら、「いや複数のエスを忘れないでね」と言われた。見渡す限りの広い牧場には羊の姿はない。今はこの丘の向こう側の斜面に行っているとのことであつた。他に牛と馬が居る。馬は牧場の見回りに騎乗するためである。

3日目に訪問した家も大牧場であつた。若い夫婦は2人とも学校の教師だそうであるが、兄弟姉妹の家が一带に散らばっている。ここで羊の毛刈り小屋を見せてもらった。天井から4台の毛刈り鉋がぶら下がっている。羊をこの小屋に追い込み、4人が一斉に4頭の羊毛を刈り上げる。毛は半地下の穴に落とし、裸の羊を外に追いやるといった流れ作業である。この毛刈りの時期は毛刈り職人の他、牧場から羊を集める係、小屋に追い込む係、あるいは刈り上げた毛を始末する係など多くの人手を必要とするため、近隣から雇うのだそうだ。

5. 名付け親になる

ワノア家での生活は訪問に明け、訪問に暮れるようなものであつた。朝食が済むと今日はイトコの家へ、夕食が済むとおぼさんの家へと、カーおぼさんの言うままに私はついて

行く。人々の話し好きなこと、おしゃべりは何時までも尽きない。格好の話題は先般のフイのことであった。次の話題はどうも私のことらしい。私を目の前において、出身は東京だそうだ、オークランド大学で勉強しているらしいなどなどマオリ語と英語のチャンポンで私の方をちらちら眺めながら話している。しかし悪気は全く感じられないので、肴にされていても気分は悪くなかった。12時近くなり夜のお茶が出ると、家に電話をしてレフに迎えを頼む。こんなに遅くまで起きて待っていなければならないご主人が気の毒であった。

ある晩例のようにおしゃべりをしている時、親戚の少女が私に「日本人はお箸で食事をするの？」と聞いた。私が答える前に母親ゴーリーが「日本人はフォークとナイフを使うのよ」と、娘をきつくたしなめた。少女は一寸首をかしげながら「箸を使うのは中国人か」と独り言を言っている。私は事の成り行きがよく分からなかったが、おそらく箸を使うのは野蛮人で、そんなことを聞いては失礼だと、母親が判断したためであろうと推測した。彼女の気遣いが分かったので、私は否定も肯定もしなかった。

ある日の午後、テプイアの病院に働くカネアを送りに行くレフについて出かけた。テプイアは温泉地だが日本のそのような賑わいはない。帰途ヒルハラマで車を止め、一軒の家に入った。ここはArnold Reedy (アーノルド・リーディ) 氏の家だという。うかつにも私はその時リーディ氏を知らなかったので、眼光鋭い少々怖そうなおじさんだと思っただけであった。

居間に上がりこんで雑談している間に、レフは僧服に着替え、家から持参したプラスチックの洗面器に水を汲み、テーブルの上に置く。リーディ氏の孫の洗礼式が行われるとのことである。レフの動作を物珍しげに眺めている私を、そばの女性たちが指差して、ひそひそと「頼んでみれば」というようなことを言っている。その子のゴッドマザーになって欲しいということらしい。私が作法を知らないからと固辞すると、ただその赤ちゃんを抱えて、牧師さんの所に行き、名前を告げればよいのだと言う。もう儀式は始まっている。ぐずぐずしている暇はないと、教えられた英語名、マオリ名、それに姓の三つの名前を口の中で唱えながら、赤ちゃんを抱えてレフの元に歩み寄った。彼は子どもを抱き取ると、自分で名前をつぶやきながら、数回洗面器の水をその額にかけた。式が終わり僧服を脱ぎながら、レフは私が赤ちゃんを抱いてくるとは予期してなかったのでたいへん驚いたと言っていた。帰宅してレフがその話をカーおばさんにすると、彼女はたいへん喜んで、「それはよかった、それはよかった」と、何度も私を抱きかかえて頬ずりしてくれた。

6. マオリ語正書法

後で聞いたところによると、リーディ氏はンガティ・ポロウの名家の系統を継ぐ長老で、イウィの歴史や文化に造詣の深いリーダーであった。リーディ氏とオークランド大学のマオリ語の先生ビッグス氏とのマオリ語表記論争も、しばしば人々の茶飲み話の話題となっていた。これはンガルアワヒアのマラエで、丁度私がムルパラに行っている間に行われた

公開討論会で、残念なことに私は聞き逃してしまった。

この討論会は実はリーディ氏が数ヶ月前に、オークランド大学のマオリ語教育はなっていないと、新聞で痛烈に批判したことに始まるものらしい。ビッグス氏はマオリ語の長母音を、母音を2つ重ねて表記するが、リーディ氏によればそれはマオリ語の自殺的表記だと批判したそうだ。ではリーディ氏はどのように表記するのか、何故自殺的なのか、このあたりを皆に聞いても、どうもはっきりしない。でも人々の大方の意見は、ビッグス氏はマオリ語を易しくして若者たちに伝えようとしている、リーディ家の子どもたちも正統マオリ語を話しているわけではない、などと評し、リーディ氏の態度は行き過ぎだと批判していた。同ジンガティ・ポロウ一族のリーディ氏ではなく、ビッグス氏の肩を持っているようで私には興味深かった。

オークランドへ帰ってから、その新聞を探してみた。要するにビッグス氏は母音に長音と短音があることしか教えていないが、リーディ氏は長音に、長い長音と短い長音、それに短音の三つの区別があると主張しているようであった。

7. さようなら ルアトリア

いよいよルアトリアを去る日がやって来た。「本当に長い間お世話になって」と礼を述べると、「これがマオリ風、パケハはそうではない」と答える。出立の前の晩、メリーはパウア貝の指輪を、カーおばさんはKaaと彫ってある金色のロケットを、私に握らせた。朝食の時、カーおばさんはレフと何かマオリ語で話している。やがて彼女は箱の中から緑色のブローチを出してきて、セーターの袖で埃を払いながら、私の手に押し付ける。「これも持っていらっしやい。今はピンが壊れてしまったけれど、町へ行けば修理出来るでしょう。母の遺品で今まで大事にしていたけれど、貴方にあげたくなったのでレフに相談したら、あげなさいと言うので。これは本物のグリーンストーン。私はもう年寄り、貴方に使って欲しいの」

10時頃レフの運転する車で、ワノア一家全員とギズボーンに向う。昼頃ギズボーン到着、私とカーおばさん、ゴーリーの3人だけがレストランへ、後の家族は車の中でフィッシュ・アンド・チップスを食べている。レストランの食事代はゴーリーのおごりであった。3時頃私が今晚泊ることになっているレフの姪ルルが迎えに来てくれる。ついに最後の別れの時が来た。

ワノア家で過ごした数日間を思い起こすと、半世紀たった今でも懐かしさで涙が出そうになる。他人を恨んだり、妬んだり、怒ったり、醜く固まりがちな私の心を太陽のように溶かしてくれたのは、ワノア一家とルアトリアの人々であった。1987年、夫とともにこの地を訪れる機会があった。残念ながらワノア夫妻は亡くなっていたが、メリーとジャッキーに会うことが出来た。

それ以来音信が途絶えてしまっていたが、全く偶然なことからジャッキーの消息が分かった。2011年の暮れ、オタゴ大学の考古学者サマーヘイズ (G. Summerhayes) 夫人

の早川理恵子さんが、クライストチャーチで偶然乗ったタクシーの運転手が、ジャッキーであった。彼は早川さんが日本人と知ると、「50年ほど前に自分の家に泊っていた日本人のミチコアオヤギを知らないか」と問いかけて来たそうだ。

8. テ・アウテ・カレッジ

自宅で気ままにピアノを教えているというルルは、大柄でたいへん魅力的な女性である。ピアノに向かい、何を弾こうかと聞くので、何でもと答えたら、映画「昼下がりの情事」の「魅惑のワルツ」が始まった。これはカーおばさんも大好きな曲であった。夕食後、誘われて演劇の練習に付いて行くと、メンバーは男性1人を含め、すべて白人であった。マオリは彼女1人、40歳代の牧師の妻という主役を演じる。

翌朝早く、彼女は弁当を作り、チョコレートとリンゴも添えて、駅までタクシーで送って来てくれた。乗車券を買おうと窓口で立っていると、彼女は「何もしてあげられなかったから」と、私の手に無理やりに1ポンド札を握らせる。押し問答をしたが、結局相手の体力に負けて、有難く頂くことにした。列車が動き出す頃、太陽がさしてきて、ホームで手を振るルルの姿がみるみる小さくなっていった。

海沿いの美しいネーピアは、1931年の大地震で壊滅的被害を受けたが、アールデコ様式で統一して景観を整え復興した、歴史に残る都市である。この辺りから列車は海岸を離れ、内陸を走る。ヘイスティングを過ぎると間もなくオタネの駅で、ホームにはタマホリ(John Tamahori) 夫妻と末娘が立っていた。今朝レフから電話があったとのこと、私は送られ、迎えられるまさに小包である。

タマホリ一家の大型の車で、国道2号線を20分ほど南下すると、牧場の中に突然赤レンガの建物が見えてきた。プケハウのテ・アウテ・カレッジである。テ・アウテ・カレッジは、1854年、マオリ少年の中等教育のために、アングリカン教会牧師ウィリアムズ(S. Williams) によって12人の生徒を集めて設立されたマオリ史上に名を残す名門校である。卒業生には、20世紀初頭、マオリ生活の向上を求めて政界で活躍した前述のアピラナ・ンガタ、マオリ初の医師となり後に入閣したマウイ・ポマレ(Maui Pomare)、また医師で人類学者としても名高いテ・ランギ・ヒロア(Te Rangi Hiroa) などがいる。彼らはこの学校でヨーロッパ式の教育を受け、それぞれ大学で学位を取って、その専門的知識により白人社会で頭角を現したマオリの有識者である。

タマホリ氏はこの学校のチャプレンで、非常勤で授業を持っている。タマホリ夫人のマキシムは数学、英語、ドイツ語、それにフランス語も教えているそうである。彼女はロトルア出身、オークランド大学で言語学を学び、8年間トンガのヌクアロファにあるアングリカン系の学校で、教鞭を取っていた。その間人類学に興味を持ち、帰国後改めてオークランド大学の人類学修士課程に入学したという、驚嘆すべき努力家である。当時修士論文としてトンガの樹皮布について執筆中であった。

頭がよい、努力家という彼女の噂はオークランド大学でもよく耳にした。本当にインテ

リという感じの一家で、意識的にはパケハではないかと思うこともあった。外で遊んでいた10歳の少女に「マオリ語できる？」と聞いたら、「できない」という答えが返ってきた。彼女の趣味は切手集め、沢山のコレクションを持ってきて見せてくれたが、漢字が読めないで、日本の切手は日本郵便という4文字で判断している。戦前の大日本帝国と印字されている切手は中国に分類されていた。

9. ウェリントンへ

プケハウからはバスでウェリントンに向う。ウェリントン行きの目的は、友人ジャネット (Janet Davidson) の実家を訪ねるためと、フィジーのヴィザを取得するためである。ジャネットはオークランド大学人類学部の修士課程の学生、飛び級飛び級で来た優等生で、私より10歳ほど年下であったが、すぐ親しくなりオークランドでも互いに下宿に行き来する仲になった。後に彼女はニュージーランド考古学会の重鎮として王立協会会員となり、メリット勲章も受けている。私の誇るべき終生の友人である。

ところでこの時はパーマストン・ノースで、バスの休憩時間に降りて、写真を撮っている間に、私の全財産を乗せたバスが発車してしまったというトンマな事件を起した。バスが走り出してから気がついて追いかけたが、もちろんバスの方が早く、私は取り残されてしまった。何とかジャネットに連絡がつき、次のバスに乗り、ウェリントンでジャネットとお父さんに会うことが出来た。しかし先のバスはすでに車庫に入っているということで、ジャネットのお父さんが車庫まで行って無事私の荷物を取り返してくれた。

ニュージーランドに来た頃は、調査対象としてマオリを考えていたが、その余りの研究量の多さに圧倒されていると、人類学部の先生方がトンガに行ったらどうかという示唆をして下さった。当時の財務大臣マヘ・ウリウリ (Mahe Uliuli) 氏が、たまたま人類学部の卒業生で、彼に紹介状を書いてくださると言う。トンガは私も是非行って見たいと思っていた所だ。

ニュージーランドとトンガの間には直行便がない。そのためフィジーで、国際空港のナンディからローカル空港のあるスバまで移動しなければならないので、何としてもフィジーのヴィザが必要である。このヴィザについては腹の立つことばかりであった。かなり前にウェリントンの大英帝国の植民地を統括する事務所に申請書を出したが、何日待っても返事が来ない。ウェリントンに行くという石田先生に、とりあえず日本大使館を通じて、問い合わせてもらった所、そんな申請書は受け取っていないとの答えだった。

私が直接ウェリントンの事務所に出かけて行き、たしかに送っていると粘ると、担当の女性はトンガの入国許可書がないから駄目だという。そういう言いがかりもあるかと思って、前もってオークランドの事務所で入国許可証を見せて、その職員に入国許可証保持を証明する手紙を書いてもらい、同封しておいた。すると彼女は、オークランドはヴィザに関して何の権限もないから、当方としては責任が持てないとのたまう。それでも粘ると費用を納めていないと言う。おかしいと思ったが、ついに見かねた日本大使館が費用を

払って、頭を下げ、私のヴィザを貰い受けて下さった。大英帝国ともあろうものが、二重取りかと私は憤慨していたが、さすがに気が咎めたのか、後日大使館には返金があったそうだ。こうしてようやく入手したフィジーのヴィザには、「大英帝国の好意により云々」と書いてあるので、またもや何が好意だと憤慨を新たにした。

10. トンガへ出発

実はニューカレドニアからオークランドに着いた翌日、挨拶のために人類学部に行った時、ここにすでに到着していた一通の日本からの手紙を渡された。夫からの便りで、その年の秋ワシントンDCで開かれる国際社会学会への招待状と、そのための若干の費用が支給されると書いてある手紙の写しが入っていた。ワシントンの国際社会学会の話は、私の出発前にも聞いていたが、その後連絡がないので、駄目なつたともと考えていたので、思いがけないこの手紙の内容は、私を有頂天にさせた。これを機会に夫と一緒に調査地に行こうと考え、費用のこと、時期のことなど、メールがない時代、遠く離れて私たちは互いに計画を練りあい、手紙を交換してきた。

こうして7月8日の夜、太平洋を超えてやってきた夫を空港に出迎えた。今では一寸考えられないことであるが、日本人に対する税関の検査は厳しく、かなり手間取ったそうである。暗い中11ヶ月ぶりに見る夫はひどく痩せ、長旅で疲れているように見えた。

トンガ出発まで10日あまりしかない。必要な荷物を送るなど走り回り、ようやく7月19日、夫とともにオークランド空港を出発した。ナンディ到着は夜10時過ぎ、今夜はナンディ泊とする。フィジーに関しては私自身の中に初めから偏見があったが、入国管理官の態度も著しく差別的であった。白人の入国者に対しては「グッドイブニング」などと愛想がよいのに、私たちにはフィジーのヴィザがないと文句をつけてきた。旅券に挟んであった別紙の入国許可証を見せると、別の書類を書くように求め、さらに記入には時間がかかり、他の入国者の迷惑になるから最後列に並べと、列から押し出されてしまった。おかげで今でもフィジーは好きになれない。

翌日ナンディからスバまで移動をし、スバの中心街にあるホテルに泊った。トンガ行きの航空機は朝7時出発と早い。フィジー・エアウェイの事務所に5時40分集合ということで未だ薄暗い中、大雨のスバの町をインド人のタクシーに乗って空港事務所へ急ぐ。

トンガまでの飛行時間は約2時間、乗客は8人、日本人は私たち2人の他に、バナナを買い付けに行くという関谷さんが乗っていた。4発のプロペラ機で真ん中の通路を挟んで両側にひとつずつ席がある。

トンガの上空は白雲が覆い、まるで銀世界を走っているようであった。低空になると、ココ椰子の林の中を抜ける道路とヌクアロファの家並みが見えてきた。飛行機はトンと地上に脚をつけるとそのまま滑走してバラックのような空港の建物に近づいて行った。建物の前に白人の女性が3人座って編み物をしている。とくに誰かを迎えに来ている様子もない。飛行機という文明の香りを求めてここに座っているのかと思ったほど、何となくわび

しい光景であった。

関谷さんを迎えに来た大洋漁業の沢村さん夫妻の車に便乗して、今日からお世話になる中尾重平さんのヌクアロファのお宅に到着した。中尾さんは和歌山県古座出身、オーストラリアの真珠ダイバーであったが、第一次大戦の勃発により真珠貝採取が終了したため、世界地図を手に太平洋を渡りトンガに来住した。手初めに床屋を開業し、その後、小売業、タクシー業などで成功し、やがて王族の娘さんと結婚したという物語の主人公のような方である。中尾邸でひとまず旅装を解き、いよいよ私たちのトンガでの生活が始まった。

1 1. オセアニア学ことおわり

ここまでの、私の「オセアニア学ことはじめ」ということになるだろうか。トンガでの調査や生活、それからその後のパラオ、また1985年以後のニュージーランドでの研究内容などについては、これまでいろいろ書いてきたが、トンガ到着までの話はただ何となく記録として書き溜めておいたもので、公表したことはない。今回こうして活字にする機会をいただいたことは、たいへんな光栄である。

もうひとつ、この5月末、この「私のオセアニア学ことはじめ (その4)」の原稿をそろそろ書かなければと思っている矢先、考えても見なかった僥倖が舞い込んできた。大同生命地域研究賞というたいへんすばらしい賞を下さるというお知らせである。この賞の第1回目の受賞者は梅棹忠夫先生、オセアニア関係では石川栄吉先生が第4回、そして篠藤喜彦先生が第19回目の受賞者である。こんな立派な賞をいただけるほど、私は立派な仕事をしてきたとは思えないし、私よりもっとすばらしい業績をあげて来られた方がたくさんいらっしゃることも十分に承知しているが、それでもやはり私にとって大きな喜びであった。この賞のこれまで26年にわたる受賞者を拝見すると、双六で言えば「上がり」に到達した方々のように見える。私はもちろん「上がり」にははるかにほど遠いが、それでも私もこれでオセアニア学に一段落つけて、「オセアニア学ことおわり」としてもよいのかなとも思った。残された人生これから何をしようかなと思案しながら、この季節、喫緊の作業である庭の草取りに精を出している。

4回にわたり、この拙文を掲載して下さった日本オセアニア学会ニューズレター編集部、およびお読み下さった方々に、心からお礼を申し上げます。本当に長い間有難うございました。

NL100号記念として、4回にわたり、青柳まちこ先生から貴重なエッセイをお寄せいただきましたこと、NL編集担当として心より感謝申し上げます。